

アルバート・バンデューラ [著]

福島脩美 [監訳]

道徳的離脱

——人はなぜ悪を為しながら平然としていられるのか

A5判上製・金子書房

2026年3月刊

定価9,350円（税込）

評者＝朝比奈牧子（法務省矯正局）



Albert Bandura といえば、1960年代にモデリング学習、1970年代に自己効力感、1980年代に社会的認知理論を提唱した大御所というイメージがあったので、新刊である本書が出版されたこと知って驚いた。しかし、モデリング学習を提唱したときにはわずか36歳の若さであったと知れば納得がいく。初期のBanduraは、「人がどのようにして攻撃的に振る舞うようになるのか」という個人レベルでの暴力機制に焦点を当てていたが、本書は、いじめやネットバッシング、会社組織やマスメディアの不正行為、思想集団や国家単位の暴力ともいえるテロや戦争行為、環境破壊行為や健康被害など、あらゆる形態の社会レベルの「悪」について、その社会を形成する個々人の心理から解き明かすことを試みた集大成である。

タイトル「道徳的離脱 (moral disengagement)」は、人が持つ道徳規範に反する行為を正当化し、罪悪感を抱かずに不正や暴力に加担してしまう心理機制を明らかにする概念である。ここだけ聞くと、非行犯罪学領域における必読の古典であるSykes & Matza (1957) の「中和の技術」が思い起こされる。例えば、両者が提案する代表的な機制を比較すると、下表のようになる。

Sykes & Matza	Bandura	機能
責任の否認	責任の転嫁・分散	加害者の責任を弱める
被害者の否認	非人間化／責任転嫁	被害者の被害者性を下げる
非難者への非難	有利な比較・正当化	規範の正当性を弱める

一見すると、Sykes & Matza も Bandura も、「人が悪事を為す際に罪悪感を回避するプロセスを説明している」という点ではかなり類似している。しかし、両者の理論的な立ち位置に、大きな違いがある。Sykes &

Matza は、「彼ら非行少年」が悪事を為す上で、どのような言い訳をして、自己の行為を正当化しようとしているかという、いわば解説者の立場を取っているのに対し、Bandura は、「我々人間」が悪事を為す上で、どのように自身の良心をごまかし、一線を超えてしまうのかという、当事者の立場を取っている。つまり Bandura は、彼ら非行少年に限らず、人は誰でもそのような性質を持っていて状況に応じて逸脱するということを前提としており、行為者を断罪するのではなく理解するために、道徳的離脱の概念を提唱したことが見て取れる。この姿勢は、フェアであるというだけでなく、課題を解決する糸口を探ろうとする姿勢につながるという意味で、より有用である。

本書には、歴史的・文化的背景がさまざまな道徳的離脱の事例が具体的に引用されており、そのことが、「悪」の普遍性をかえって印象付ける。非行少年や犯罪者は、社会を映す鏡であるとよくいわれるが、悪事は、人の在り様そのものをあぶり出す存在ともいえるのではないかと考えさせられた。

●文献

Sykes GM & Matza D (1957) Techniques of neutralization : A theory of delinquency. *American Sociological Review* 22-6 ; 664-670.

●原書：Albert Bandura (2015) *Moral Disengagement : How People Do Harm and Live with Themselves*. Worth Publishers.